

# 町史

とっておきの話

280

福島県植物研究会会長

薄葉うすば  
満みづる

## ただみ水田雑草考①

— 田んぼの雑草を見直す —

▼今月号から水田雑草についての連載です。▼執筆はいわき市在住の薄葉満さんです。薄葉さんは、福島県を代表する水生植物研究者として知られており、これまで多くの論文を発表するとともに相馬市史や原町市史なども執筆されました。著書に『ふくしまの水生植物』があり、現在は第4次尾瀬総合学術調査員として活躍中です。▼身近でありながら知られていない、奥深い雑草の世界をお楽しみください。



▲ウリカワの生える水田(坂田地区)

田んぼに生えるイネ以外の植物は一般に水田雑草と呼ばれています。水田雑草は取っても取っても生えてくるので、私たちの祖父の時代は毎月のように「田の草取り」に追われていました。しかも、はうようにして手作業で引いたり、除草機を押し根ごと掻き散らしたりする物理的除草がほとんどだったのが大変な重労働でした。しかし、戦後、農薬による化学的除草が普及するにともない、そのような重労働は軽減され除草効果も一段と高まりました。その結果、いまは雑草の生えた水田を目にするのが珍しいほどになったのです。このような現象は農家の長年の悲願であり、農業上歓迎すべきことかもしれません。しかし、農薬は、もともと自然界には存在しなかった化学物質ですから、低毒性とはいえ同時に

他の生物にも負荷がかかるはずで、田んぼでゲンゴロウやドジョウなどに出会うことが少なくなっただけでもその影響といえるでしょう。地球上の多種類の生物が互いにつながりあい、バランスを取りながら生きています。その多種類の生物と、生物どうしのつながりあいの豊かさを生物多様性と呼んでいます。近年、人類が持続的に発展してゆくためには、この生物多様性を維持することが大切であると世界的に認識されるようになりました。農薬や他の化学物質を過剰に使用することは、この生物多様性の低下につながると考えられています。そこで、イネづくりに可能なかぎり農薬の使用量を減らすという気運が生まれてきました。農薬そのものも、製造段階で魚毒性の少ないものなどに

変わりつつあります。後継者不足あるいは農産物価格の低迷といったきびしい農業情勢のもとで、生産あるいは農地を農地として維持していくためには、農薬への依存度が高くなるのはやむを得ないことかもしれません。しかし、できるだけ自然環境への負荷を少なくする配慮が求められる時代になっていることも確かです。農薬を少ない量で効果的に使うためには、雑草の名称や生態あるいはイネに与える害の大小などをひとつひとつよく知っておく必要があります。

地球上のあらゆる生物には遺伝子資源としての価値があります。水田雑草は、さまざまな方法で、耕作という人為にうまく適応する能力を持った遺伝子を備えていると考えられます。その遺伝子が、いま私たちの生活に直ちに利用できるというわけでももちろんありません。しかし、資源という見方で研究を進めていけば、雑草といえども役に立つときがきつとあるはずですから、すべて無くしてしまうということではなく、少量ずつ多種類の雑草が生育できる場を主たる生産現場以外に確保しておくというようなことも、将来的には検討されてよいのではないかと思います。私たちの身の回りに、かつて薪や山菜あるいは落ち葉を集めたりした里山があります。里山は、伝統的な農村の暮らしや文化を支えてきた身近な自然であり、田んぼもその構成要素の一つです。そこに生える雑草は、たとえば魚の産卵場になったり、オタマジャクシの餌になったり、あるいはトンボに羽化の場を提供したりと生態的には何らかの役割を担ってきたはずで、イネ以外の植物を雑草一般としてひとくくりにするのではなく、ひとつひとつ個性を持った植物として凝視すると、単なる邪魔者として排除するには忍びないものもあることに気がつくと思います。いま只見町の里山ではいったいどのような水田雑草がみられるのか、もう一度田んぼの中をのぞいてみましょう。